

2019年の晩夏、大学の夏季休業期間をつかってパリの街を訪ねた。実は、筆者が2年間の留学生生活をすごしたのはパリではなく、パリの東駅から特急列車で2時間の、フランス北東部に位置するアルザス地方である。東部を縦断するライン河を渡ればすぐにドイツで、緑深いシュヴァルツヴァルトが広がり、一方、北部に聳えるジュラ山脈はスイスまで続いている。かつてはケルト人が住んでいたというこの土地はまさにヨーロッパの「十字路」で、様々な民族が行き来した末にようやくフランス領に落ち着いたのは第二次世界大戦終焉間近の1944年のことであった。

このアルザスの中心都市ストラスブールの大学院に入學し、どうにか諮問会を終えて帰国した直後は、これではばらくアルザスはいいかな、などと思っていた。井の中の蛙ではないけれど、現地の洗礼はなかなか厳しく、気高く空へとのびるストラスブール大聖堂の姿とともに立ち上がる記憶がなんとなく足を遠ざけさせた。結局、再訪を果たすまでに7年もかかってしまったが、その間も交通の面でも美術史研究の面でも拠点となるパリには、いつまでもどこかおのぼりさん気分ですら年1回は滞在していたのである。このときの訪問の主な目的は、オペラ地区にほど近いリシュリュ通りにある美術史研究所の図書館で資料を収集すること。そのあとは地方都市をいくつかめぐり、最後はロンドンへたどり着かねばならないので、パリに割ける時間は決して多くはない。それでも調査とは別に訪ねたい場所があった。

2019年4月15日の夕方、パリのノートル・ダム大聖堂で火災が発生した。火は瞬間に燃え広がり、古い木材を骨子とする身廊および翼廊を覆う屋根の大部分と、当時、修復作業中であった尖塔が崩落した。パリの中心を流れるセーヌ川の中州、シテ島に建つこの大規模な建造物は、パリ司教モーリス・ド・シュリーの指揮のもと1163年に着工されたゴシック建築の代表作である。14世紀にほぼ現在の

五廊式聖堂の姿が完成した以降、ほとんど廃墟同然となった不遇の時代もあったものの、1854年に修復作業が開始され、1991年には「パリのセーヌ河岸」の名称で周辺の文化遺産と共に世界遺産に登録された。いまでは誰もが知っているパリの人気観光スポットである。

「ノートル・ダム Notre-Dame」とは「わたしたちの貴婦人」という意で、つまり聖母マリアを指す。聖母に捧げられ、「ノートル・ダム」の名を冠したゴシックの教会堂は、筆者が留学生生活をおくったストラスブールを筆頭にフランス各地に存在する。だがやはりユゴーの小説の影響か、多くの人にとって「ノートル・ダム」とはパリのそれを指すようである。そんな著名な歴史的建造物の火災は、日本のメディアでも大きく取り上げられた。

まだまだ日本ではなじみの薄い西洋の「中世」という時代を、これほどまでにアクチュアルに感じさせる出来事がかつてあっただろうか。実のところ、火災当時とりわけ話題にされていた焼け落ちた尖塔は19世紀に再建された箇所であり、中世の創建時のものではない。それでも、大聖堂が中世からの時間の流れやパリの歴史を、まるで地層のように鮮やかに可視化していることにはかわりない。ニュースを通して見る現地の人々の表情や言葉からは、失われたことによってかえってくっきりと、その存在の象徴性を増しているように感じられた。身近なところでも、火災翌週のある大学の講師室では、カトリックの学校ゆえか誰もがこの話題に触れていた。驚いたのは、みなそれぞれが大聖堂にまつわるエピソードをもっていることで、そのひとつひとつに興味深く耳を傾けた。一方の筆者はというと、火災のほんの数か月前にもパリにいたにもかかわらず、あいかわらず調査スケジュールをこなすのにいっばいいっばいで、その姿を視界の端に捉えつつ足早に通り過ぎてしまっていたのである。あの日、悲痛な面持ちで、あるいは興奮した様子でインタビューに答えていた生粋のパリっ子たちを前にして、ほんの一時しかパリに暮らしたことのない者が何かを述べることにはためらいもある。それでも、あらためて大聖堂の姿を見たい、と思ったのだ。

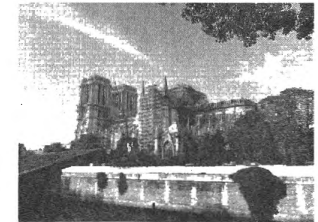
パリ滞在2日目、ちょうど同じ時期にやはり調査のためやってきた友人と、夕方、地下鉄のhotel de ville駅で待ち合わせをしてシテ島へ向かった。夏のパリは18時を過ぎてもまだまだ明るい。道に並ぶアイスクリーム屋さんのパラソルがいかにもバカンス中の長閑な雰囲気を感じさせていたが、大聖堂が近づいてくるとなんとなく緊張してきた。しかしその日、大聖堂の内部に入るのはもちろんのこと、接近することも叶わなかった。先の火災を機に屋根などに使われていた鉛が空気中に飛散してしまい、その汚染除去作業のため大聖堂の周囲の道路が封鎖されていたのである。とりわけ周辺地域の子供たちへの健康被害を懸念しているそうで、大聖堂全体がバリケードで覆われていた。それでも周囲をぐるっと歩いてみると、外壁のあちこちが黒く煤け、なんとも痛々しい。ノートル・ダムのフライグ・パットレスを、後陣の背後にあるジャン2世広場から眺めるのが、まるで絶滅した巨大恐竜をみているようで好きなのだが、その美しいアーチにも補強のための木材があてがわれていた。満身創痍の貴婦人を撮影してもよいものなのか。どこか申し訳ない気持ちになりながらその姿を写真に収め、いつか再建されたらまた訪ね、蠟燭を捧げようと、友人と約束した。

翌年の2020年は、もしかしたら秋に、遅くとも冬には、と思っているうちに、はじめてのオンライン授業の準備に追われ、時間はとぶように過ぎていった。そうしたなかで、あの日のノートル・ダム訪問をきっかけに芽生えた、あらためてパリのなかに残る中世の痕跡をさがして、自分の目で確かめておきたいという思いがふくらんでいった。長い中世の歴史のなかでも筆者が研究対象としてきた彩飾写本の多くが制作されたのが、ヴァロワ朝時代前半、つまり1328年から百年戦争終結の1453年頃までのパリある。度重なる戦、なによりベストの猛威にさらされたこの時代を、パンデミックを経験してしまったいまもう一度みつめなおしたら、今までみえていなかった何かに気づくことができるかもしれない。なんだか大げさになってしまったが、ふたたびパリの街を、お気に入りのお菓子屋さんに立ち寄

りながら歩きたい、というのもまた本音である。そうしてようやく2023年9月、そして2024年3月にもしだけ、パリの地に降り立つことができた。

今年の3月、大聖堂はなんとあの焼け落ちた高さ約96メートルの尖塔を取り戻した姿で立っていた。当初、この尖塔をどのようなデザインで再建するのかについては美術や建築関係者の間でかなり話題になっていた。先述の通り、そもそも2019年の火災で失われた尖塔はゴシック時代のものではなく、1845年に開始された大聖堂の修復事業の折に、責任者ヴィオレ＝ル＝デュックの設計に基づいて再建されたものであった。このときヴィオレ＝ル＝デュックは、残されたデッサンを通して知られる中世のデザインに、ややもすると過剰ともいえる変更を施しており、それが批判の対象にもなってきたのである。しかしフランスは、このヴィオレ＝ル＝デュックのデザインで再建することを選択した。それはつまり、いま生きているわたしたちの記憶のなかの貴婦人を蘇えらせるということである。

ちょうど2月のFrance 2のニュースでは、この尖塔の最上部の仕上げ作業に携わるロレーヌ地方の鉛職人が取り上げられていた。木組みの尖塔を鉛のプレートで覆い、雨風に耐えられるよう補強するそうだ。大聖堂のために地方の優秀な職人たちが一堂に集い、持ち得る技を尽くして仕事にあたるその様子は、書物を通じて想像していた中世の石工たちが現代にあらわれたようであった。ノートル・ダムは今年の12月に再びその扉を開く。フライング・パットレスの下をもう一度くぐることを楽しみにしながら、ひきつづきパリのなかの中世をさがしてゆきたい。



たかぎ・まきこ（所員）